

国内美術館におけるレジストラの実務と現状

総合開館30周年記念トークセッション
「美術館のコレクション・ケア：レジストラと美術輸送の
視点から見るコレクションの現在とこれから」
開催記録・質疑応答を通して

堀田文

東京都写真美術館 レジストラ

国内美術館における レジストラの実務と現状

総合開館30周年記念トークセッション
「美術館のコレクション・ケア：レジストラと美術輸送
の視点から見るコレクションの現在とこれから」
開催記録・質疑応答を通して

堀田文

はじめに

本稿は、国内美術館におけるレジストラ実務の現状を知ることが目的とし、当館が総合開館30周年記念事業として開催したトークセッション「美術館のコレクション・ケア：レジストラと美術輸送の視点から見るコレクションの現在とこれから」における発表概要をまとめ、新たに登壇者への質疑応答を加えたものである。

レジストラとは、館内外での作品移動や新規受入のプロセス、ならびに作品および関連情報の管理・保存を担う専門職である。分業化の進む海外美術館では、コレクション・マネージャーやコンサヴァターとともに作品管理を支える役割を果たし、ARCS (Association of Registrars and Collections Specialists) のような組織も存在する。一方、レジストラ専任者の少ない日本においては、その実務内容や情報を国内で共有する機会が十分でない状況にあった。

当館でのトークセッションでは、国内のレジストラ専任者および美術輸送に携わる保存修復の専門家を招き、実務に基づく具体的な事例や課題の共有を通じて、作品管理・保存と活用の在り方を検討する場となった。本稿では、当日時間の都合により割愛されたため、後日筆者が行った質問に対する登壇者の回答を補足として記録し、国内美術館におけるレジストラの実務と現状を総括する。

【トークセッション基本情報】

日時：2025年11月2日（日）14:30-16:30

会場：東京都写真美術館 1階ホール

登壇者：小川絢子（国立国際美術館 主任研究員 レジストラ）

寛奈雅子（国立西洋美術館 主任研究員）

相澤邦彦（ヤマト運輸 [美術] スペシャルアドバイザー/
コンサヴァター）

モデレーター：堀田文（東京都写真美術館 レジストラ）

【構成】

発表1：「国立国際美術館におけるコレクション・ケア」

小川絢子（国立国際美術館 主任研究員 レジストラ）

発表2：「国立西洋美術館のレジストラ業務」

寛奈雅子（国立西洋美術館 主任研究員）

発表3：「地球環境保護と作品輸送、温湿度管理、燻蒸、
コンディションチェックに関する事例紹介」

相澤邦彦（ヤマト運輸 [美術] スペシャルアドバイザー
／コンサヴァター）

【発表概要】

発表1：「国立国際美術館におけるコレクション・ケア」

小川絢子（国立国際美術館 主任研究員 レジストラー）

国立国際美術館は1977年、大阪に開館した国内外の現代美術を中心とする作品を収集・保管・展示する国立美術館である。2025年3月末時点における所蔵作品点数は8,241点に及ぶ。2015年に新設されたレジストラー職は学芸課美術室に属し、常勤のレジストラー業務は小川氏が単独で担当している。

同館におけるレジストラー業務は以下のとおり多岐にわたる。

- ・ **貸出**：事務手続、コンディションチェック、梱包計画、集荷返却立会対応、クーリエ（美術館職員）
- ・ **情報管理**：新収蔵作品情報のシステム登録、作品情報の更新
- ・ **受入**：作品情報の取得・整備、コンディションチェック、梱包・収納、指示書確認
- ・ **修復**：選定のための調査、計画立案、事務手続、作業立会
- ・ **収蔵施設管理**：ファシリティレポート、収納計画・管理、備品管理、外部倉庫、改修
- ・ **環境管理**：温湿度の設定・計測、IPM（総合的有害生物管理）、収蔵庫・バックヤードの清掃
- ・ **展覧会（コレクション展）**：出品作品の事前調査、展示作業立会、記録、指示書の整備
- ・ **展覧会（企画展）**：展示方法や温湿度など特別に対応が必要な作品のケア

貸出業務のひとつであるクーリエの実例として、2024年8月に実施された大型平面作品である田中敦子《地獄門》（1965-69年、ビニール塗料・アクリル・カンバス）の韓国国立現代美術館（ソウル）への輸送について、現場での画像とともに紹介がなされた。

また、情報管理業務の分担として、レジストラーがフィジカルな作品情報を担当し、歴史情報は情報資料室が担当している点、さらに内部データベースからのNMAOサーチ（国立国際美術館独自の外部公開データベース）への反映についても、情報資料室が担っている点が説明された。

収蔵施設管理の実例としては、収蔵庫のLED化工事（設備改修）に伴う作品移動作業が取り上げられた。作業スケジュール表および

現場画像をもとに、調整・計画から実施に至る一連の過程が提示された。作品搬出、養生作業、LED 化工事、IPM 清掃、作品収納までの全工程は約 2 か月半に及び、LED 化工事に伴う約 20 年ぶりの全面的な収蔵庫清掃によって、作品の所在管理、ラベリング、収納の見直し、収納箱の作成といった作品管理作業も併せて実施された。

最後に、コレクション展における 35mm フィルム映像作品の再展示事例として、シプリアン・ガイヤール《Artefacts》(2011 年) が紹介された。本作は 35mm フィルムによる映像作品 (HD から変換、カラー、サウンド、9 分 [ループ]) であり、映写機、展示用フィルム、音響機器を使用する。同館では 2012 年度に収蔵、2013 年に初展示されており、約 12 年ぶりの再展示にあたっては、展示前のフィルムおよび機器類の調査・準備・展示中の定期的なメンテナンスが可能な映写技師の手配・調整、会期後の次回展示を見据えた準備および指示書の作成など、レジストラ業務の中核をなす作業が行われた。それらを小川氏が担当し、設営に 7 日間、撤去に 2 日間を要した。本作には 35mm フィルムをループさせるルーパー装置を使用するが、映写機のランプの発熱によりフィルムが乾燥して硬くなり、ルーパー装置の回転が止まってしまうため、展示室の設定湿度は通常より約 3% 高めに設定するといった環境管理も行われた。映写機のランプ調達、ループ再生によって傷が入るフィルムの交換、将来に向けた展示用フィルムの追加作成に加え、今回とは異なる映写技師が立ち会っても設営が可能となるよう、配線や留意点を含む設営記録およびアイテムリストを、写真・映像とともに情報として蓄積している。

発表 2: 「国立西洋美術館のレジストラ業務」

笈奈雅子 (国立西洋美術館 主任研究員)

国立西洋美術館は 1959 年にフランス政府から寄贈返還された松方コレクションを基礎として設立・開館した、西洋美術に関する作品および資料を収集・保管・研究・展示する国立美術館である。2025 年 3 月末時点における所蔵作品点数は 6,683 点に及ぶ。レジストラグループは、学芸課内に 2022 年に新設された管理調整室に属し、2025 年 11 月現在、笈氏を含めた 3 名で構成されている。

同館におけるレジストラ業務は、館に出入りするすべての作品の移動の管理・記録およびそこに付随する調整業務を主とする。具体的には以下が挙げられる。

- ・所蔵作品・寄託作品の移動に伴う管理・調整・記録 (館内移動)
- ・所蔵作品・寄託作品の貸出に伴う管理・調整・記録 (館外貸出移動)
- ・自主企画展の作品借用に伴う管理・調整・記録 (館外借用移動)

これらの作品移動や貸出、借用に際しては、保存修復室、保存科学室、キュレーターなどの各専門職とチームで業務を進める体制がとられており、レジストラグループは情報整理を担いながら全体

のバランスを図る中立的なコーディネーターとして機能している点が、国立西洋美術館の特徴である。

同館のレジストラグループは各担当者と協力しながら、常設展示における作品の館内移動のみならず、研究者による調査や教育普及プログラムでの作品活用に伴う移動についてもすべて記録している。移動記録は、作品管理データベース（館内用）内の作品個別ページに設けられた「移動歴」に、所在タイプ（目的）、所在地、所在地内棚番号、日付とともに記載されている。

作品管理データベース（館内用）と館ウェブサイト（外部公開用）は一部連動しており、例えば、館内用データベースで作品の所在地が展示室に更新されると、館ウェブサイト上の当該作品ページにも「展示中」と自動的に表示され、併せて展示場所の館内地図が表示される仕組みとなっている。これにより、外部からの問い合わせ対応における館内業務の負担軽減にもつながっている。

展示室における来館者の作品撮影については、著作権上、個人利用のための撮影自体が一律に禁止されているわけではないため、著作権保護期間内の作品については、撮影禁止サインではなく、SNSへの画像投稿を控えるよう促すサインをキャプション付近に示す対応がとられている。また、寄託作品についても、従来は一律に撮影禁止としていたが、現在ではレジストラグループの提案に基づき、寄託者の意向を確認した上で、作品ごとに撮影可否を判断する運用へと移行し、撮影可能な作品増加にもつながっている。

館外貸出においても、館内移動と同様に、レジストラグループが全体のコーディネーターとして機能している。その業務は、受付（キュレーターとの事前交渉を経た貸出依頼の受理）、協議（館内スケジュールの確認およびキュレーターによる貸出意義の検討、保存修復室による作品状態確認、保存科学室による貸出先環境の確認のとりまとめ）、依頼者への連絡、契約（諸条件の交渉・確認、作品画像の提供）、貸出（保存科学室等との輸送方法の確認・輸送箱作成、クーリエ対応、輸送スケジュール調整、搬入、集荷時の作品点検、キュレーターとの申し送り、搬出、データベース更新）、返却（クーリエ対応、輸送スケジュール調整、返却時の作品点検、データベース更新、図録・資料の受取および情報資料室での保存）という一連の工程に及ぶ。クーリエや集荷・返却時の作品点検はキュレーターを中心に学芸課内で分担するため、その調整もレジストラグループが行っている。

作品貸出契約における一例としては、経費、保険、輸送・クーリエ、セキュリティ、展示環境条件、画像利用・撮影、一般条項といった項目について、オンラインで公開されているコペンハーゲン国立美術館の貸出規約が紹介された。併せて、貸出と表裏一体となる借用のフローについても、担当キュレーターおよび保存科学室との協働を含め、館内コーディネーターとして担う業務が示された。

国立西洋美術館におけるレジストラの特徴は、専門家とのチームワークの中で発揮されるコーディネーション業務、作品貸借契約や保険等の専門文書業務に基づくリスクマネジメント、ならびに著作権をはじめとするライツ対応にあるといえる。

さらに、寛氏が共感している Erin McKeen^{❖1} 氏の「The Straw that

❖1 Collection Manager, Registrar U.S. National Archives and Records Administration

stirs the drink – the role of the registrar in the museum world.^{❖2} (レジストラの役割は、“美術館というドリンクをまぜるストロー”だ。)] という比喩が紹介された。併せて、寛氏が日頃から心がけている点として、同館の歴史的性質を踏まえた「国内外のミュージアムネットワークおよび国際的な潮流への意識」、そして美術館の核であるコレクションが適切に管理・活用されるよう、記録の管理にとどまらず、コレクションに関わる人々を支え、つなぎ、調和させることによって、美術館およびコレクションの価値を高めていく姿勢が示された。

❖2 Erin Mckeen, “The Role of the Registrar in the Museum World”, in John E. Simmons and Toni M. Kiser (eds.), *Museum Registration Methods* 6th edition, Rowman & Littlefield, 2020.

発表3：「地球環境保護と作品輸送、温湿度管理、燻蒸、コンディションチェックに関する事例紹介」

相澤邦彦(ヤマト運輸[美術] スペシャルアドバイザー／コンサヴァター)

公立・民間双方の美術館においてコンサヴァターとして勤務してきた相澤氏は、現在、国内有数の美術品ロジスティクス部門を有するヤマト運輸において、スペシャルアドバイザー／コンサヴァターとして作品保存を軸に様々な業務に携わっている。海外の美術輸送専門団体によるカンファレンスにも多数参加し、世界的な動向や情報を常に更新しながら、国内の環境や構造における作品保存・維持管理、情報管理の課題および改善方法について考察、検討を重ねている。

本発表では、以下のトピックを中心に、欧米における美術輸送の最新動向が紹介された。

- ・ 作品輸送について／再利用可能な輸送箱、排出ガス算出、クーリエ省略
- ・ 温湿度管理（適正変動範囲）の緩和について
- ・ 燻蒸と環境保護
- ・ コンディションレポートのデジタル化／ペーパーレス化について

まず、国内においては環境負荷低減を目的とした車両の電動化が通常貨物用の小型車両では進みつつあるものの、美術品輸送に用いられる中型車両以上への適用については技術的ハードルが高く、普及にはなお時間を要すると見込まれる。スペインの美術品輸送会社ではディーゼル車が美術品輸送に使用されているが、同社独自開発のシステムにより、車両位置および運行状況が逐次記録され、作業の効率化とペーパーレス化が進んでいる事例が紹介された。

使用後のクレート（作品輸送箱）については、海外では従来、美術館や美術輸送会社内で保管、あるいは保管スペース不足によって廃棄されるケースが多かったが、近年のヨーロッパでは廃材減少を目的として、繰り返し使用可能な汎用クレートの開発と運用が進められている。具体例として、オランダの TURTLE 社（リースのみ）、ドイツの arca 社（リースのみ）、スペインの SIT 社（リースのみ）、イギリスの ROKBOX 社（市販・リースともに対応）の製品が紹介された。金属製のクレートは長期使用が可能である一方、重量があり高額で、

輸送燃費の面で課題がある。他方、木製クレートは金属製に比べて軽量かつ安価であるが、耐用年数が短い。いずれも必ずしも環境負荷が低いとは言い切れず、クレートを取り置き、加工して繰り返し使用する例も少なくない。いずれの場合も、保管場所の確保と使用スケジュールの管理・調整が不可欠となる。

さらに、欧米の美術館では、輸送時に排出される二酸化炭素量の提出を輸送業者に求めるケースも増加している。GCC (Gallery Climate Coalition) や AIC (American Institute for Conservation) が提供する計算システムが広く用いられているが、これらの数値はあくまで概算であり、厳密な算出は困難である。その一方で、美術館側も環境負荷を把握し、透明性を担保しようとする姿勢を示すことが求められている。なお、環境規制や状況は国ごとに大きく異なるため、統合的なガイドライン作成は難しい状況にある。

作品輸送に帯同するクーリエの派遣については、新型コロナウイルス感染症流行以後、海外館におけるヴァーチャル（オンライン）対応、代理対応、展示時のみの立会（輸送中／返却時はクーリエなし）といった運用が増加している。しかし、オンライン対応の場合などでは、画面越しでは作品状態が十分に確認できない、輸送中の状況が不明といった問題もあり、緊急時の即応的な対応が困難である点が課題として指摘された。

館内環境の省エネルギー化に関しては、海外館において、温湿度設定を 16-25℃ /RH40-60% とし、24 時間で± 10% の湿度変動を許容するという考え方が、BIZOT（世界主要大型美術館館長によるグループ）作成のグリーン・プロトコルによって近年共有されつつある。高湿度になりやすい日本の環境下では、国内館において約 23℃ /RH50-55% が適正值として定着しており、海外館の新たな設定値は小さくない変化として受け止められると考えられる。ただし、作品の技法や素材によって適切な対応は異なるため、最終的な判断はコンサヴァターの専門的知見に基づいて行われる必要がある。国内においては、作品保存担当、施設管理担当、設備技術者、輸送会社など、多職種間の緊密な連携が不可欠である。

また、虫害およびカビ対応に用いられてきた燻蒸用薬剤エキヒューム S は、2025 年 3 月末をもって、販売・生産終了となった。これは、昨今の物価の高騰に加え、同薬剤の成分が地球環境に一定の影響を及ぼすことが背景にある。今後は、エキヒューム S を用いた燻蒸ができなくなる。別の薬剤としてアルプによる燻蒸が可能な業者も存在するが、こちらも将来的に使用不可となる可能性が指摘されている。水害を伴う自然災害ではカビ被害が深刻化するが、その対応も今後の重要な課題である。総合的有害生物管理 (IPM) は予防措置としては有効である一方、個人や作家による作品の保管環境の現場では、十分な IPM の実施が困難であるという現状も示された。

コンディションレポートのデジタル化（ペーパーレス化）については、海外において普及が進んでおり、Articheck 社による、タブレット端末を用いたクラウド保存型システムを採用する美術館、ギャラリー、輸送会社が増加している。輸送追跡機能やチャット機能も搭載されており、日本語が未対応であるものの、作品情報管理の効率

化およびデジタル・アーカイブ化に有効なシステムであると紹介された。この製品の普及により、オンライン・クーリエの増加が後押しされている可能性も指摘された。

最後に、相澤氏から、サステナビリティと作品・文化財の関係についての考察と課題が示された。地球環境と美術品・文化財はいずれも公共財・共有財であり、有限性を有する代替不可能な存在である。美術館およびその周辺における環境負荷軽減の取り組みは、通常業務に新たに付加される業務となるため、本格的に取り組むには「予算」「人手」「時間」の確保が大きな課題となる。同時に、公共財・共有財としての作品・文化財の保存業務との両立が求められることから、各現場において、その都度、適切な判断と調整が必要となる。この点において、判断と調整を担うコンサヴァターやレジストラーの人材不足は、今後さらに深刻化することが予測される。一方で、地球環境問題は全世界共通の課題であり、日本における取り組みが他国と比較して著しく少ない状態が続けば、国際的な信頼関係にも影響を及ぼしかねない。今後の環境対応は、美術館の信用力や海外との作品貸借の可否にも関わる重要な要素となりうる。こうした課題を踏まえ、まずは実行可能な取り組みから着実に進めていくという姿勢そのものが大きな意義を持つことが示された。

【質疑応答】

トークセッション当日、時間の都合により割愛したモデレーター（筆者）からの質問に対する、小川氏、笈氏、相澤氏による回答を補足として掲載する。

・これまでのキャリアと現職就任時について

堀田：小川さん、相澤さんは修復のバックグラウンドを、そして笈さんは新聞社の文化事業部を経て、現在のキャリアにたどり着かれています。現在の仕事に役立っている、これまでのトレーニングや以前の職務経験には特にどのようなものがありますでしょうか？

小川：作品のフィジカルな管理（梱包や輸送、保管など）の計画を立てる上で、保存修復分野で学んだ素材や形態に関する知識が役立っていると感じます。また、環境管理（温湿度、虫菌害対策など）においては、博物館での勤務で見聞きした手法などの参照や、保存のカリキュラムの中でベースとなる知識を学んでいたことが大きな助けになっています。

相澤：私の場合は保存修復の仕事を軸にしつつも、各組織内の調整や説明に関わる仕事もかなりあり、また組織および美術館の運営や経営に関わる場面も多々ありました。美術館や作品周辺の専門的な知見と、組織運営そのものに関わった経験は、それぞれ生きているように考えています。また、以前からいくつかの大学で授業をして

おりますが、受講生から寄せられる感想や質問、レポートはどれも興味深く、ときにとても鋭く核心的で、気づかされることも多いです。これらも日々の仕事や考察の糧となっております。

寛：新聞社で長年、国内外からの作品借用を主とする展覧会の組織・運営に携わってきたことで、作品借用の契約、輸送・保険手配等の実務知識を得られました。借用側の立場・事情を理解していることも、貸借の機微として重要なことだと思います。また、業務を通じて知り合った欧米のレジストラーたちには、現在もしばしば具体的な質問に答えてもらうなど、そのネットワークも大きな財産となっています。

堀田：御三方とも館内／社内で初めて設置されたポジションに就かれています。就任時大変に感じられていた点がありましたら教えてください。

小川：すでにある業務の流れの中で自分が何を担うべきかを探ること、どこからどこまでをレジストラーの業務範囲とするか／できるかを見極めと周知。レジストラーがいない状態でも館の運営は成立していたわけなので、レジストラーがいることで（各人の負担を減らすということ以外に）どのようなメリットをもたらせるかを常に考えています。

寛：今まではレジストラーがいなくても成立していたので、業務をどう再分配するかは今でも課題です。

相澤：日本の物流業界全体が大きな変化の時期にあるので、どう対応するかを常々考えています。

・作品貸出について

堀田：（小川さんへ）「貸出依頼（相談）受付、ファシリティレポート等のチェック、館内使用調整、コンディションチェック、あれば修復依頼、先方との集荷・返却日程の調整、当日の現場対応」という一連のフローは小川さんが一手に担っていらっしゃるのでしょうか。

小川：はい、当日の現場対応には作品管理チームのメンバーも参加しますが、基本的にそれ以前のフローは私が担当しています。ただ、今年度から案件ごとにチームのメンバー1名と分担する試みを始めたところです。なお、貸出件数は年間でおおよそ20件・100点ほどです。

堀田：（小川さんへ）作品貸出の際、借用館のファシリティレポートの確認で特に気を付けてチェックしている点をお聞かせください。また、自館のファシリティレポートを作成・修正される際、参考にされた海外館のフォーマット等ありましたら、お聞かせください。

小川：トラックヤードの広さや構造（屋根・シャッターの有無）、作品用エレベーターや間口の寸法、動線を注視しています。まれに、作品寸法では問題なくても、梱包状態で寸法がオーバーしてしまう場合などがあるためです。温湿度も特にチェックするようにしています。

参考にしたのは、AAM (American Alliance of Museums)、UKRG (UK Registrars Group) のフォーマットです。以前、イギリスのある美術館から作品を借用した際は UKRG のフォーマットで提出しましたが、さらにかなり細かい質問をいただいたので、そのやりとりを反映して、Yes / No 以外にも詳しく記載するようにしています。

堀田：（寛さんへ） 貴館の企画展では海外からの借用も多いかと思いますが、自館のファシリティレポートの作成や修正は、ほかの室との共同で行われていますでしょうか。

寛：自館のファシリティレポートは従来、展覧会担当者（キュレーター）が中心となって保存科学室や施設担当者と作成しており、現在もその体制が主流です。管理調整室が関与することでどのような効果を生み出せるか、検討しているところです。

堀田：（相澤さんへ） 貴社が通常請け負う美術館同士の作品借用に伴う輸送業務の際、現場サイドから相澤さんにアドバイスを求められることはありますでしょうか。また、これまでのご職場や現職でファシリティレポートをご覧になる際、特に注意してチェックしている点がありましたらお聞かせください。

相澤：やはり対象作品のコンディションや、様々な技法・素材について相談、質問されることが多いです。ファシリティレポートに関しては、作品保存体制、組織体制、施設の安全面をトータルでみていました。特に海外等であれば、展示室や作品移動動線がわかる図面も確認しました。図面がない場合は、送付を求めることもありました。聞いたことのない館で、ウェブサイトを確認しても状況がよくわからない場合はいろいろ調べなければなりませんでした。

堀田：（小川さん・寛さんへ） 新型コロナウイルス感染症流行時、国内外への作品が貸出中という状況があったかと思うのですが、各館でのご対応はどうかお聞かせください。

小川：国内貸出については先方の状況を確認後、会期延長・延期に対応しました。海外貸出については、いずれの館も会期延長を希望していましたが、そもそも国内に比べて輸送の調整が難しいことに加え、感染症流行の状況がどのくらい長引くかが全く読めないで、延長は認めずに会期終了後の速やかな返却を求めました。おおむねスムーズに返却されましたが、現地で職員が出動できないため連絡が取りにくい館もありました。

また、当時香港にコレクションをまとめて貸し出す企画があり、ちょ

うど感染症の発生が報道され始めたころに輸送がありました。やむなくクーリエは派遣せず、展示の監督はメッセージや通話アプリで動画や写真を逐次共有してもらいながら確認・指示出しを行いました。

寛：私が入職する前のことで詳細はわかりませんが、海外に貸していた作品は、そのまま展覧会の会期が延長され、予定より数か月遅れて閉幕、引き取りに行ったようです。

・海外クーリエについて

堀田：これまでご自身が海外へクーリエとして派遣された際、対応に苦慮する場面や記憶に残るご経験がもしありましたら、差し支えない範囲でお聞かせください。

小川：特定の場面ではないですが、海外クーリエ、特に航空機に同乗する場合は体調管理に苦慮しています。屋外での長時間の待機や、早朝や夜間の移動、不規則な食事時間（スキップも多い）によって体調を崩しがちになりますし、一度はひどい貧血を起こしたこともあります。貸出先はどれも万全の態勢で受け入れてくださるので、作品の取り扱いや展示で特筆すべきことはありませんでした。

寛：対応に苦慮することはありませんでしたが、海外の美術館へ作品を搬入したときにクレートを部屋の真ん中にぽつんと置かれるのに慣れません。その土地では地震がないので柱にくくりつける必要もなく、むしろ部屋の中央のほうが安全なのだと思いますが、日本で生まれ育った人間にはどうしても不安が残ります……。それでも、郷に入っては郷に従う、でそのまま部屋の真ん中に置いてきています。

相澤：ひとつは、ドイツへの貸し出しで、(当時勤務していた)自館分だけでなく多くの他館分のクーリエも兼ねたことがあって、物量も多く緊張感がありました。またフランスへの貸し出しで、そのときは片道4日近くかかり、作品も10t車1台分とやはり物量が多く、いろいろ大変でした。これらに限らず、毎回気を付けなければならなかったのは、海外でのパレットへの積載方法でした。

堀田：(小川さん・寛さんへ) 国立国際美術館、国立西洋美術館の貸出条件項目等(特に海外向け)に、貸出中に自然災害や戦災が起こった際の特記事項等は盛り込まれていますでしょうか。

小川：盛り込まれていますが、新型コロナウイルス感染症流行前に作成したもので、感染症流行や昨今の戦災に対応する見直し・更新はできていません。

寛：特に言及していません。こちらの上承を得たうえで先方が付保した保険の範囲内で補償責任を負ってもらう、ということかと思います。

堀田：(相澤さんへ) 海外の美術輸送関連の学会やワーキング・グループで、自然災害や戦災に関する話題等は近年ありましたでしょうか。

相澤：例えば、パリのノートルダム火災における作品救出、最近のLAの大規模な山火事の際の作品避難などが話題となりました。

・内部用・外部公開用データベースについて

堀田：(小川さんへ) 独立行政法人国立美術館の5館総合目録(公開データベース)以外に、貴館独自のコレクション・データベースである「NMAOサーチ」が2023年あたりに始動・公開されたと記憶しています。小川さんがレジストラとして入られたことで、情報整理や修整が進み、公開に至ったのでしょうか。

小川：自館のコレクション・データベース公開の展望は以前よりありました。私の着任時期と前後して(国立美術館内で)歴史情報(来歴、展覧会歴など)の公開が求められつつあったため、まず情報整理とその蓄積のため館内の作品管理システムの更改が必要になり、私が担当しました。「NMAOサーチ」の開発・公開はその後、別の担当者によって行われました。

堀田：(寛さんへ) 国立西洋美術館所蔵の作品は来歴や展示歴など、1点につき膨大な量の作品情報があるかと思いますが、今後、自館ウェブサイトのデータベースにそのような情報を含め、情報量の強化等を図られていく展望などありましたら、お聞かせください。

寛：現在も作品の来歴や展示歴は自館ウェブサイトで公開しています。画像については可視光による正面からの写真しか公開していないので拡充の余地はあるかもしれませんが、まずは現状レベルの情報公開を新規収蔵作品についてもなるべく速やかに行うことを優先させたいと思います。

堀田：(小川さん・寛さんへ) 展示記録として、展覧会会場撮影を実施されていると思いますが、保存・公開予定がありましたらお教えてください。

小川：公開可能な展示風景画像はNMAOサーチで順次公開を進めています。

寛：外部カメラマンに依頼して、年に3回程度、展覧会場の記録写真を撮影しています。今は権利関係が整理できていないため単なる館内記録用ですが、将来的にはアーカイブとして自館ウェブサイト等で公開できればと思います。

堀田：(小川さん・寛さんへ) コンディションレポートのデジタル化

は内部で行われていますでしょうか。また、ご予定等ありましたらお聞かせください。

小川：過去に作成されたレポートのデジタル化は行っていません。タブレット等で記録できるよう、フォーマット自体をデジタル化すべきとの意見はありますが、具体的には進んでいません。

寛：過去のコンディションレポート（紙）をスキャン・PDF化して保存する、ということは少しずつ行っています。現役のレポートをデジタル上で行う、という点については、まだ最適な手段を検討できていない状況です。

・収蔵庫について

堀田：（小川さんへ）今年は特に猛暑が長く、館内外の収蔵庫の温湿度キープが例年より大変だったのではと思っておりますが、例年とは違った温湿度設定や特別な対応等ありましたら、お聞かせください。

小川：温湿度データを見る限りでは、外気温の影響を受けているという感じはそれほどなく、特別な運転も行っていません。ただし猛暑によって、館外に設置している熱源設備に負荷がかかっているという見解はあります。

堀田：（寛さんへ）国立西洋美術館で収蔵庫の環境管理はどの室が担っているか、差し支えなければお教えてください。

寛：作品管理という観点では学芸課各室（絵画・彫刻の収蔵庫は絵画・彫刻室、版画・素描の収蔵庫は版画・素描室、IPMの観点では保存科学室）が、温湿度や照明などファシリティの観点では施設担当が主に担当しています。

堀田：（相澤さんへ）社内収蔵庫（内部用、外部貸出用）に関する管理やアドバイス等に関わっていらっしゃるか、差し支えなければ、お聞かせください。

相澤：関わっていますが、限定的です。もう少し関われば、と思っております。

堀田：（相澤さんへ）ご発表内にもありました、海外美術館での収蔵庫温湿度の設定について、何か補足がございましたら、お聞かせください。

相澤：変動幅の緩和、そのための空調機制御は、個別に確認しないとエコにならないだけでなく、電力消費量が増えることもあるだろうと思われれます。また個別の作品（技法、素材、構造、状態）に対してどの程度の緩和が可能かは、専門家を交えて検討する必要がある

と思います。

・業務上解決していきたい課題について

堀田：業務上、今後解決していきたい課題や目標とする着地点がありでしたら、お聞かせください。

小川：作品に関する情報をレジストラーに集約するという流れは定着しつつありますが、集約した情報の再共有が課題となっています。情報取りした後の整理に手が回っていません。画像や文書を集約するフォルダの整理が進まないことと、そこへアクセスすると情報がある、という認識がなかなか浸透しないことが課題です。作品管理システムの見直しも必要です。業務も増える一方なので、レジストラーが担当する業務と、分担できる業務を整理する必要性を強く感じています。

相澤：現状では国内において、また美術館・博物館だけでなくその周辺領域において、作品の保存や維持管理、情報管理などの領域が万全ではないことを念頭におきつつ、その原因は何か、いかにこれらを改善できるか、そのための具体的な課題は何かについて、考察を続けたいです。

・参考文献および参考ウェブサイト

堀田：現在の業務に関連して、日常的に参考にされている文献やウェブサイトがありましたら、お教えてください。

寛：日常的に、というほどではありませんが、広く美術業界の情報収集という意味で The Art Newspaper を見たり、AAM や Museum Association のメールマガジンを読んだりしています。

相澤：長期間、継続的に確認している文献やサイトはありません。ただ、様々な、なるべく多くの情報、文献、書籍に目を通すようにしています。

・所属学会や部会について

堀田：ご所属またはご出席されている国内外の学会やワーキング・グループがありましたら、お教えてください。

小川：会員になっているのは、全国美術館会議の保存研究部会、文化財保存修復学会、ICOM-CC (International Council of Museums – Committee for Conservation)、INCCA (International Network for the Conservation of Contemporary Art) です。海外のレジストラー組織のウェブサイトは時々閲覧しています。

寛：なるべく海外のレジストラーの様子を知りたいと考えており、ERCには昨年、出席しました。そこで知り合ったオーストラリアのレジストラーに教えてもらい、ARCにも参加していますが、メルマガを読むくらいであまり積極的に参加はできていません。

相澤：文化財保存修復学会、明治美術学会、全国美術館会議（個人会員）、ICOMおよびICOM-CC（個人会員）、IIC（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）、INCCA、GCC（Gallery Climate Coalition）に所属しています。発表でもふれましたが、ヤマト運輸が加盟しているため、ARTIM（Art Transporters International Meeting）、ARCS、ERCにも出席しています。

・国内でのレジストラーの会／ワーキング・グループについて

堀田：本日お聞かせいただいたようなデータベースや作品展示、輸送等の情報を共有し、相談できるような場として、今後皆さんと一緒に国内でレジストラーのワーキング・グループを作っていければと考えております。もし具体的なアイディア等がありましたら、ご提案いただけると嬉しいです。

小川：これまでは個々同士、一対一のつながりのみでしたが、今回このような会を企画してくださったことで、関係者が一堂に会してお互いの業務内容を知る機会を得られましたので、これまでよりもつながりやすくなるのでは、と期待しています。組織化すると運営が難しい、負担になる、という課題はあると思いますが、まずは年に一度くらい、気負わない集まりを開くところから始められると良いと思っています。

寛：素晴らしいと思います！ レジストラーが日本で定着していくためには、レジストラーの実態と、レジストラーが存在することで美術館全体の業務がどう改善されていくのかを発信することが大切だと思います。

おわりに

レジストラーは、国内美術館においてははまだ専任者の少ない専門職である。分業化が進む収蔵作品数の多い海外館においては、レジストラーが複数在籍し、所蔵品貸出、新規収蔵、借用、保険手続など、担当分野がさらに細分化されている。

筆者がインターンとして在籍した米国シカゴ美術館では、作品管理・保存に関わる専門職として、レジストラーのほか、プリント・スタディ対応を含む所蔵品管理を担うコレクション・マネージャー、保存修復の判断および処置を行うコンサヴァター、保存修復のための作品材質等を分析するサイエンティスト、作品のマッティングや額装、保存箱作成等を担うテクニシャン、作品のハンドリングや壁

掛けを行うアート・ハンドラー、貸出用クレート製作を担うスタッフが館内職員として配置されていた。これらの専門職員や各部門が相互に連携し、それぞれの専門性を生かしながら情報を共有し、日常的に高い水準でコレクションの管理・保存業務にあたっていた。

国内館においても、コレクション作品の管理・保存と、展示・研究を含む活用は本来、両輪として機能させていくべきものであるが、海外館と比較すると、コレクション管理の体制は十分に整っているとは言い切れず、展示企画を行う学芸員が作品管理も同時並行で担ってきた状況が長く続いてきた。

そのような中、国立西洋美術館や当館のようにサイエンティストの在籍する保存科学研究室を有する館や、また近年では国立国際美術館のようにレジストラー専任者を置く館も現れ、非常に緩やかな変化ではあるものの、専門職をめぐる状況に一定の変化が生じつつある。

今回、国内館において実際にレジストラー専任者として業務にあたっている小川氏および寛氏の発表からは、両館におけるほかの専門職（専門担当室）との役割分担やバランスの違いにより、各館で求められるレジストラーの業務範囲やフローが異なっている現状を具体的にうかがい知ることができた。

また、コンサヴァターの視点と豊富な実務経験を有する相澤氏からは、美術館とその周りを取り巻く世界的動向と求められる基準、国内の現状および山積する課題について示された。近年の急激な気候変動により、従来の収蔵庫環境や、航空便による作品およびクーリエの長距離移動に対する意識や対応も変化しつつある中で、館内外において留意すべき要素は増加しており、作品管理専門職員の必要性が一層高まっていることが改めて認識された。

当館が総合開館して30年、本トークセッションの開催を契機として、館や国の枠を超えたレジストラー間の情報交換・共有が可能となるネットワークづくりを進め、コレクションの管理・保存と活用間に立ちながら、気候変動や各国の情勢等、将来想定される状況変化に対応していく活動を継続していきたいと考える。

トークセッション開催および本記録の作成にあたり、小川絢子さん、寛奈雅子さん、相澤邦彦さんには多大なご協力を賜りました。改めまして、ここに厚く御礼申し上げます。また、トークセッション開催当日には多くの皆様にご参加いただきましたこと、心より感謝申し上げます。